

第2回 複式簿記の内容と形式 ―形式を変えても変わらぬもの―

〈学習のねらい〉

第2回では、現に行われている貸借仕訳形式だけでなく、それもあわせて3つの仕訳形式(方式)をみることで、貸借仕訳形式が1つの形式にすぎないことを明らかにします。そして、そうした別形式を示すことによって、第1回でみた複式簿記の本質的特徴がいつそう浮き彫りになることをみます。

※ 以下の図表は、手入力には複雑なものがありますので、当面は放送大学テキスト『現代の会計』(放送大学教育振興会、2008年)をご参照ください。

(1) 形式と内容―形式を変える(1)―

形式その1―貸借複記(貸借簿記)

Q：複式簿記の「内容」と「形式」ということですが、どういうことでしょうか？

A：これからの議論で次第に明らかになりますが、端的に言えば、**形式を変えても変わらぬもの**(内容)、これを見つけることが本質に迫る方法だということです。逆に言えば、1つの形式だけでは、その本質的なところはなかなか見えてこないということです。

Q：通常の貸借複記が1つの仕訳形式にすぎないということですか？

A：まさにその通りです。それも含めて3つの形式をみることで、現に行われている仕訳方式を相対化します。この「相対化」という点が大変重要です。仕訳は貸借仕訳しかない(唯一絶対)と暗黙に思いこんでしまっているからです。

Q：では、3つの形式を順にご説明下さい。

A：前回では家計の例でしたが、これからの議論では、次の企業会計の例を用いて説明します(ただし、取引の説明は省略。また、ここでは損益計算書と貸借対照表も省略)。これは現に行っている通常の貸借仕訳方式ですので、特に説明は要しないでしょう。

〔設例2〕 企業会計の数値例(放送大学テキスト34ページ)

Q：商品の売買損益は「3分割法」ではなく、いわゆる「分記法」ですね。

A：取引例も会計処理もできるだけ易しくしています。複式簿記の本質的特徴をつかむという目的にとっては、それで十分だからです。もう少し言いますと、実はそれだけでなく後の回でのキャッシュフロー計算書の簿記との対比のためでもあります。逆に言えば、「3分割法」はキャッシュフロー計算ではその計算上の擬制性が浮き彫りになります¹。

ともかくも、何事もそうですが、できるだけ平易な例でもって本質面を説明することが肝要です。そこに、教師の力が試されることにもなるわけです。

¹ この点は、拙著『キャッシュ・フロー簿記会計論(3訂版)』(森山書店、2005年)補論3.2「キャッシュ・フロー計算と商品勘定の3分割」で論じています。

形式その2-2 勘定系統の貸借配置

Q: では、2つ目の形式をご説明ください。

A: 第2の形式は、貸借対照表を構成する残高勘定項目(実体勘定、より一般にストック勘定)と損益計算書を構成する損益勘定項目(名目勘定、フロー勘定)の2つの勘定系統を、それぞれ貸借に独立配置する方式です(図表2-1)。

図表2-1 2勘定系統の貸借配置(放送大学テキスト36ページ)

Q: 初めてみる仕訳ですね。こんな仕訳のやり方もあるんですね。

A: そう、どのテキストにもない仕訳形式です²。特に、プラス・マイナスの代数符号が導入されていることに注意してください。

Q: マイナスを用いるのはなぜですか?

A: それは、第1回でみましたが、2面的計算システムとしての複式簿記の本質的特性を浮彫りにするからです。その点で、この形式は有効な方式といえます。

Q: 確かに、借方側の残高勘定項目の合計20,000、貸方側の損益勘定項目の合計20,000、となっていますね。

ただ、貸方側は損益勘定項目の合計ですので20,000が当期利益になることはわかりますが、借方側の残高勘定項目の合計も当期利益になるのですか?

A: いい質問です。あとの回でも説明しますが、借方側の残高勘定項目の合計20,000は実は純資産の増加額になります。

それが当期利益になるのは、図表をよく見れば、交換取引(#1, 5, 6, 7, 8)が上下のプラス・マイナスとして記入されますので交換取引をすべて合計してもゼロ、あとは損益取引(損益取引の相手勘定)を合計することと同じになる、以上のことからわかります。

Q: 損益取引は貸借に記入されていますが、交換取引は残高勘定項目間の増減取引なので、そしてその残高勘定項目は徹底して借方側の配置なので、上下の記入(上下の復記)になるわけですね。

A: そうです。ところで、この仕訳方式からみると、通常の仕訳方式(形式その1)のあることが見えてきます。さて、それが何であるかわかりますか?

Q: ちょっと難しいですね。

A: わかってしまえば「コロンプスの卵」、簡単です。答えは、マイナスをプラスにするため、ある操作を行います。そうすると、通常の貸借仕訳方式になります。たとえば#1の交換取引をよくみてください。

Q: ある操作? あっ、わかりました。マイナスをプラスにするため反対側にもっていく。買掛金-70,000を反対側(貸方)にもっていくと、通常の(借方)商品70,000/(貸方)買掛金70,000になりますね。

A: その通りです。では、損益取引ではどうでしょうか。そこでも、そうになっています

² この新たな仕訳方式は井尻雄士『利速会計入門』(日本経済新聞社、1990年)第2章にでていますので紹介しておきます。2面的損益計算システムとしての複式簿記の学習そして教育の観点からは、むしろこの新方式の方が理解しやすい方式といえるでしょう。

か？

Q：ここも同じですね。ただ、費用に関する仕訳はどちらもマイナスですので、互いに反対側にもっていく。例えば#3をみればわかりますね。収益の場合は、どちらもプラスですので、ここだけは通常の貸借復記の仕訳と同じになっていますね。

A：よくできました。ちなみに、こうしたマイナスを避けるというのは、実は、昔の商人が負の数を嫌ったこと（負数の忌避）ともかかわっているようです。ここでも、物事を歴史的にとらえる学習の大切さがあるといえますね。

なお、付論ではこの2つの仕訳方式による試算表の構造を対比（間接型と直接型）して示していますので参照してください。

Q：ところで、この新しい仕訳方式だと、確かに複式簿記すなわち取引の貸借復記とはいえなくなりますね。上下でもいいわけですから。

A：この点は、次の第3の形式をみることでよりいっそうはっきりします。ここで強調したいのは、この方式によって個々の取引仕訳に関する二元関係——「複記」の関係——と、全体の計算システムに関する二元関係——「複式」の関係——との区別（どちらも二元関係）が明確になるということです。

そして、その区別は複式簿記における2面性とは何かを明確に浮き彫りにしてくれます。逆にいえば、通常の仕訳方式は、この方式からみれば、どちらも二元関係であるがゆえに、そうした複式簿記のもつ本質的特性をむしろ見えにくくしているといえます。

(2) 貸借から行列へ形式を変える (2) -

形式その3－貸借から行列へ（展開表簿記）

Q：では、次に第3の形式をご説明いただけますか。

A：第3の形式はコンピュータの表計算で知られる「展開表」（スプレッド・シート）の形式です。これからの議論で次第に明らかになりますが、これは複式簿記にとっても大変有効な形式です。そこで、先の数値例をこの展開表上に映してみましよう（図表2-2）。

図表2-2 損益計算の展開表（数値は簡略）
（放送大学テキスト37ページ）

Q：どこが取引の仕訳ですか？

A：各取引番号で示される各行が仕訳になります。すでにヨコ破線で区別していますが、上側が（損益に影響する）損益取引、下側が（損益に影響しない）交換取引です。

Q：交換取引の例えば#1は買掛金が-70となっていますが、先の形式2と同じですね。

A：いいところに気づきましたね。展開表では、先の形式その2（2勘定系統の貸借配置方式）と同じく、プラス・マイナスの代数符号が用いられています。もう少し言えば、形式その2を表形式にしたのが形式その3、とみてもらってもけっこうです。

Q：同じくプラス・マイナスの代数符号を用いても、ここでの展開表の形式ではもう貸借の形式はなくなっていますね。

A：そうです。貸借復記による仕訳が1つの仕訳形式にすぎないことがはっきりします。

なお、#1の買掛金-70ですが、そもそも買掛金が生じているのになぜマイナスかという疑問がでてくるでしょうね(この点は、実は先の形式その2でも同じ)。その点は、後の回で説明します(代数符号の2段階表示)。

Q: 上側の損益取引の仕訳はどうですか?

A: ここは少し説明が必要です。損益取引においては、各取引につき残高勘定項目に関して1つの数値のみが記入されることに注意しましょう。第1回での単式簿記での仕訳(図表1-3)を思い出して下さい。

ただ、その相手勘定を直接示せば資本(ここではその果実といえる累積利益)ですが、その変動原因を明らかにする収益・費用勘定(損益勘定、一般にフロー勘定)を設けることができます。この点はあとで説明します。

Q: 仕訳は一応わかりました。では、網掛けのところをご説明下さい。

A: まず残高勘定項目(実在勘定)だけの単式簿記ですが、各残高勘定項目の当期増減額が最下行に示され、その現預金-10から社債-100までを合計すれば当期利益20になります(タテ集計のヨコ合計)。

後の回で詳しく説明しますが、これが実は純資産の増減計算(財産法原理)をしていることになります。

Q: 各残高勘定項目の増減なら、その期首残高と期末残高さえわかればいいことになりませんか?

A: グッド・ポイントです。ここでは、直接取引仕訳からではなく、各残高勘定の期首と期末の残高さえわかればその増減額はわかりますので、そこから利益計算を行うことができる、という点に留意しておいてもらえばと思います。

Q: では、複式簿記では?

A: 複式簿記では損益取引につき損益勘定項目(名目勘定)が設定されますので、それを集計すればよいことになります(損益法原理)。損益取引はむろん取引ですので、損益が残高勘定項目の増減ではなく、取引から直接的に計算されることになります。

Q: 展開表ではどこに示されていますか?

A: 累積利益の下に示されている数値です。そこに(累積利益の直接増減ではなく)収益と費用の損益勘定が設定されます。例えば#2は商品販売益(収益)、#3は給与(費用)です。

展開表ではそれらの数値は各行の仕訳の数値をヨコ集計したもので、また破線下側の交換取引のヨコ集計はすべてゼロとなりますので、結局、ヨコ集計したものをタテ合計することに等しいといえます。

Q: ヨコ集計のタテ合計ですか、なるほど。単式では?

A: すでにみましたが、逆にタテ集計のヨコ合計となります。確かめてください。

なお、両者の計算結果20が必ず一致することは、展開表の中の数値をすべて合計したものに等しいということからわかります(その理由は、比較的容易ですので宿題)。

Q: ヨコ集計のタテ合計とタテ集計のヨコ合計、きわめて対称的ですね。そして、いずれも秩序立てられた計算になっていますね。展開表の中の数値をすべて合計するなら、ランダムに合計しても20になりますから。

A: まさしくその通りです。この秩序立てられた記録計算システムという点が重要です。

展開表の形式は、まさにそのことを浮き彫りにしてくれます。

先に財産法原理と損益法原理の2つの損益計算のあり方に触れましたが、その点もふくめて要約しておきましょう(図表2-3)。この第3の形式の強みは、その全体を見せているところにあるといえます。

図表2-3 秩序立てられた2つの損益計算
—展開表の形式から—

{	財産法の原理 … 結果 (ストック比較) 計算=タテ集計のヨコ合計
	損益法の原理 … 原因 (フロー比較) 計算=ヨコ集計のタテ合計

(3) 複記と複式

複式関係と複記関係—2つの二元関係

Q: 表(行列)形式の有効性がよくわかりました。

A: さらに、この行列形式でもって、先の個々の取引の「複記」関係と全体の計算システムに関する「複式」関係との区別を示しておきましょう。

Q: 2つの二元関係とは?

A: 図表2-4をご覧ください。先の数値例の展開表(図表2-2)を一般的に示したものです。端的には、そこに示されている $x = y$ と $X = Y$ との区別です。

図表2-4 「複式」関係と「複記」関係
—2つの二元関係—
(放送大学テキスト39ページ)

Q: それぞれの等式の意味は?

A: まず行列の中で示される $x = y$ ですが、これは個々の取引仕訳における「複記」の関係を示しています。また、 $X = Y$ はすでにみまましたように全体システムとしての「複式」の関係を示しています。この2つの二元関係の区別が大切です。

Q: 前回強調されましたが、複式簿記すなわち $x = y$ ではない、ということですね。

A: そうです。 $X = Y$ 、すなわち損益の二面的記録計算、これが第1回でもみまました複式簿記の重要な特徴です。端的に示せば、ストック勘定システムによる損益計算=フロー勘定システムによる損益計算、です。重要なことは仕訳の形式を変えることで、そのことが浮き彫りになるということです。

Q: 確かに、展開表の形式は両者の区別を明確に示していますね。

A: 1つの形式のなかだけでは、とりわけ通常の貸借複記の形式では、なかなか見えてきません。強調したいことは、形式を変えること、そして形式を変えても変わらぬもの(内容)をつかむこと、こういった見方(ものの見方、とらえ方)の大切さです。

【付論】仕訳方式と試算表の構造

本文で説明した2つの仕訳方式、すなわち形式その1 (通常の貸借仕訳方式) と形式その2 (2勘定系統の貸借配置方式) を試算表の構造からみると、形式その1がその間接型の構造になるのに対し、形式その2が直接型の構造となります。この点を補足しておきます。

試算表の構造—直接型と間接型

Q：直接型と間接型の試算表とは？

A：図表2-4をご覧ください。2つの試算表 (合計試算表) の構造を一般的に対比して示したものです (数値例で具体的に確認してください)。ただし、A=資産、L=負債、K=資本、 Π =累積 (留保) 利益、R=収益、E=費用、 Δ は増減をそれぞれ表しています。

図表2-4 試算表の構造—直接型と間接型—

(放送大学テキスト48ページ)

Q：間接型は通常の試算表ですね？

A：通常の仕訳方式 (形式その1) による試算表では、2勘定系統 (残高勘定と損益勘定) の各勘定が、直接型での左右の配置と違って、ひとつのTフォームのなかにそれぞれ上下に配置されています。

Q：直接型は数値例でもでてきた2勘定系統の貸借配置方式 (形式その2) ですね。

A：そうです。直接型では2勘定系統が左右の分離独立的な配置 (分離独立型構造) になっていますので、複式関係は直接型では左右の関係——左右の「複式」——になります。これに対し、間接型では上下の関係——上下の「複式」——になっています。

Q：「左右の複式」と「上下の複式」、なるほど。

A：さらに、間接型では損益 $\Delta\Pi$ が独立にあらわれず、それぞれの勘定系統 (残高勘定と損益勘定) の貸借差額分として互いに抱き込むような形で埋没しています。

Q：直接型ではそれが左右に分離されて、それぞれ独立にでていますね。

A：そうです。直接型では試算表の左側 (借方) と右側 (貸方) のそれぞれの合計値は $\Delta\Pi$ そのものになります (損益の二面計算)。二面的損益計算という点で、まさに「直接型」というわけです。

Q：「直接」と「間接」の意味がやっとわかりました。ところで、こうした異なる構造がでてくるそもそもの原因はどこにあるのでしょうか？

A：いい質問です。では、その点をさらにみてみたいと思います。まず、両者を見比べて何か気づく点はありませんか？

減算方式、仕訳方式、試算表の構造

Q：2つの試算表を見比べると、直接型では間接型と違って代数符号が用いられていませんね。

A：いいところに気づきました。両者の相違は、プラス・マイナスの代数符号を用いるかどうかというところにあります。そのことは、結局、減算方式の違いからくるように思われます。

Q: 減算方式?

A: はい、マイナス符号を用いない減算方式である「加算的(間接的)」減算方式と、マイナス符号を用いる「直接的」減算方式との違いです。

Q: マイナス符号を用いる直接的減算はむろんわかりませんが、加算的減算とは?

A: たとえば60円の商品を買うため100円玉で支払ったとします。そのおつりの計算を、10円玉を1個ずつ60円に加算していき100円になったとき、つまり70円、80円、90円、100円となったとき、加えた4つの10円玉がお釣りになるという計算です。そこにはマイナスの演算がありません。実際、アメリカにいるときコンビニで経験しましたが、1ドル紙片を1枚、1枚、…と加えておつりの計算をしていました。

Q: Tフォームでは?

A: たとえば100円-60円=40円(直接減算)…(1)は、加算的減算(間接減算)では60円+40円=100円…(2)となりますが、Tフォームでは(2)の左辺が借方、右辺が貸方となり、借方=貸方の貸借バランスで差額40円(60+x=100)を計算しているわけです。

Q: 直接型からみれば、減算の方式も間接型、仕訳の方式も間接型、そして試算表の構造も間接型になっているわけですね。

A: その通りです。直接型をみせないで、こうした通常の仕訳方式とその試算表のあり方もみえてこないのです。ここが大切なところです。

以上、要約すれば図表2-5のようになります。

図表2-5 減算方式、仕訳方式、試算表の構造

⎧	「加算的」減算方式 (間接的)	⇒	「間接型」仕訳方式 (通常の仕訳方式)	⇒	「間接型」試算表構造 (抱き込み合体型構造)
	「直接的」減算方式	⇒	「直接型」仕訳方式 (新しい仕訳方式)	⇒	「直接型」試算表構造 (分離独立型構造)

(以上、08年8月20日)